

○現状分析 (学力調査等の結果を踏まえた内容別・観点別の分析表)

2年		平均正答率		分析
		本校	都	
理科		47.5	49.3	本校の平均生徒率は、都の平均正答率よりも1.8ポイント低い。各観点において、本校の平均正答率は都の平均正答率よりも、0.5～4.7ポイント低かった。最も都の平均正答率を大きく下回ったのは、思考・表現の観点である。最も差異の小さかった観点は知識・理解の観点である。
観点別 正答率	関心・意欲	---	---	
	思考・表現	38.8	43.5	
	技能	59.0	60.1	
	知識・理解	46.8	47.3	

3年		平均正答率		分析
		本校	区	
理科		56.5	55.9	本校の平均正答率は、区の平均正答率よりも0.6ポイント上回った。各観点別において、思考・表現では1.2ポイント、知識・理解では0.4ポイント、本校の平均正答率は区の平均正答率より上回っているが、関心・意欲、技能の観点では本校の平均正答率は区の平均正答率を下回っていた。最も区の平均正答率を下回った観点は技能で、最も差異が小さかった観点は思考・表現である。
観点別 正答率	関心・意欲	55.8	55.9	
	思考・表現	54.7	53.5	
	技能	67.9	69.5	
	知識・理解	55.9	55.5	

○指導方法の課題分析と具体的な授業改善策

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善策	補充・発展的な学習指導計画
1年	<ul style="list-style-type: none"> 知識や理解の定着はできている。 実習を行う際の課題の設定や見通しをもって実習に取り組む力を育てていく必要がある。 生徒間での理解度に差が見受けられるので理解が不十分な生徒に対して補充的な学習活動を行う必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 実習において、生徒一人一人が目的をよく理解したうえで実験に取り組むようにし、目的を理解していない生徒を作らないようにする。 実習をグループで行わせ、生徒間での対話や発表を積極的に取り組ませる。 	<ul style="list-style-type: none"> 補充教室等で、理解が不十分な生徒に対して基礎的な知識を身に付けさせる。 ICT機器を活用し、これまで図表等でしか確認できなかった事項に対して映像や音を交えて視聴覚的な体験をさせることで科学への興味を引き出す。
2年	<ul style="list-style-type: none"> 技能並びに知識・理解の観点は都の平均との差異が1ポイント以下であり、十分に定着していると考えられる。 思考・表現においては、事前知識の確認や結果を十分に確認した上で、生徒が主体的で対話的な活動を通して、考察を行うなどする学習活動が必要と考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 思考・表現する力を育むために、ロジックツリーや雲雨傘などのフレームワークを利用して、考えやすくした上で、生徒が考察を行えるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 補充学習として、考えるために必要な基礎知識や実験や観察の結果を、確認させる。 発展的な学習として、フレームワークなしで論理的な思考で考察ができるようにさせる。
3年	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の思考・表現は区の平均を上回っており思考力や表現力を育むことができていると考えられる。 区とのポイント差が最も大きかった技能において特に生命、地球領域の内容が不十分となっているため、補充的な学習活動が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 実験の目的を疑問や課題から生徒自らが考えるように授業の導入における発問の工夫を行い、生徒の事象への興味、関心を引き出すとともに、見通しを持って実験観察に取り組む姿勢を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 2年次の地学分野、生物分野における実習経験が少ないことが技能の定着を遅らせているため、今後の実習で補充可能な内容は積極的に取り組ませる。 ICT教材を活用し、映像資料等を用いて発展的な内容についても触れることで学んだことを実践的に活用する力を育てる。